

パネル発表「動物飼育が子どもの心情に与えるもの」 ～気づきを高める継続飼育～

小椋 郁夫



1. はじめに

「動物を飼育した子どもや教員の感動の体験：第8回全国学校飼育動物研究会（小椋・白木・堀部2008）」では、岐阜県内のウサギやニワトリ、チャボなどの動物を飼育している4059名の児童とその指導者161名から「動物を飼育して、うれしかったこと、分かったこと、悲しかったこと、困ったこと、分からないこと」などについて、自由記述でのアンケートを行い、21,000文の記述を分類整理して、多くの感動的な言葉を通して、飼育することよっての生命尊重の豊かな心情が育成されていることが分かった。

今回の小学校学習指導要領解説生活編第1章総説 2生活科改訂の趣旨（2）改善の的事項（I）」にも、「自然に直接触れる体験や動物と植物の双方を自分たちで継続的に育てることを重視するなど、自然のすばらしさや生命の尊さを実感する指導の充実に配慮する。」、また、さらに「第3章生活科の内容 第2節生活科の内容（7）」にも、「動物を飼ったり植物を育てたりして、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもち、また、それらは生命がもっていることや成長していることに気づき、生命をもっていることや成長していることに気づき、生き物への親しみをもち、大切にすることができるようになる。」と記述され、学校での動物の飼育や植物の栽培の必要性が改めて見直されるようになった。

しかし、昨今の鳥インフルエンザの流行などにより、動物を飼育する学校、とりわけニワトリを飼育する学年が激減している現状、また、ウサギが死んだらそれ以後飼育をやめてしまう学校の現状など、前記した動物飼育の重要性、生活科の学習指導要領解説に飼育することの大切さが述べられている現状とは相反している傾向がある。

たとえば、岐阜県岐阜地区の平成22年度から26年度までの飼育動物状況をみても、
（飼育施設数） 85施設→64施設で21施設減、
（ウサギ飼育頭数） 293頭→206頭で87頭減、
（その他の動物飼育頭数） 154→77頭で77頭減、
とすべてに減少傾向にある。

2. 研究方法

（1）アンケートの内容

1. で述べた学校での動物飼育が、児童の感動体験や豊かな心の育成に関連していることをさらに明確にするために、今回は、飼育を行っている学年とその前の学年に対して、
という一文によるアンケート調査を行った。

これは、前回2008年のアンケートの実施において、「うれしかったこと」、「分かったこと」、「悲しかったこと」など、細分化して質問することによって、自分の思いをどちらに書けばいいか迷っている児童が多く見られたことによる。

また、記述は自由記述で箇条書きにさせ、15個書けるようにした。また、もっと書ける児童に対しては、「＝もっとあったら、うらに書いてくださいね＝」と表の用紙の一番最後に記述した。

（2）対象学校・学級

対象学校・学級、児童の人数は次の通りである。（A小学校） 飼育学年 = 4

年生 5 3 名

飼育前学年 = 3 年生 5 0 名
 (B 小学校) 飼育学年 = 3 年生 5 5 名
 飼育前学年 = 2 年生 5 4 名
 (C 小学校) 飼育学年 = 4 年生 3 4 名

○あなたは、学校で飼っているウサギについてどんなことを知っていますか。
 あるだけ教えてください。

1.
2.
3.
4.
5.
6.
7.
14.
15.

3. 研究結果と考察

(1) アンケートの分類と集計結果

それぞれのアンケートの結果を「食べ物」、「体の様子」、「見た目」、「様子」、「感触」、「分類」、「生と死」、「学級」、「動き方」、「その他」の10項目に分けた。それぞれにどのような記述があるか一例を述べると次の通りである。

○「食べ物」では・・・ラビットフード、白菜、キャベツ、ニンジン、ホウレンソウ など

○「体の様子」では・・・目が赤い、耳が長い・ぴんと立っている、しっぽが短い・丸い など

○「見た目」では・・・可愛い、おとなしい など

○「感触」では・・・気持ちいい、温かい など

○「様子」では・・・いつも走っている、元気、人に慣れる、よく食べる、鼻がくくん など

○「分類」では・・・ほ乳類、夜行性 など

○「学級」では・・・○年○組のウサギ

など

○「生と死」では・・・赤ちゃんが生まれた、赤ちゃんは違う部屋に入れる、死んで悲しい など

○「動き方」では・・・飛び跳ねる、ジャンプが強く上手、穴にはいる、土を掘る、逃げる など

○「その他」・・・糞が丸い、ミルクを温めてあげる、雑草注意、雄と雌がいる、喧嘩する など

具体的には、【図1 アンケートの回答例(B小学校3年)】、【図2 アンケートの回答例(C小学校4年)】を見ていただきたい。

(2) 集計結果の考察

次に、各学校の各学級それぞれで、この10項目について記述した個数を比較した。その結果、【図3 各小学校、各学級の10項目の比較】のような結果となった。

この集計結果から、次のような考察が得られた。

①ウサギの飼育学年の方がウサギについての記述 個数が多い。

一人あたりの記述個数の平均は、

A小では、飼育学年(4年) 5.6
 個
 と飼育前学年(3年) 3.1
 個

B小では、飼育学年(3年) 8.8
 個
 と飼育前学年(2年) 7.3
 個

C小では、飼育学年(4年) 10.6
 個
 と飼育前学年(3年) 6.3
 個

であり、どの学校でも、飼育学年の方が飼育前学年よりも多く記述できていた。

②飼育前学年は、「体」や「見た目」などの見て分かる記述が多いが、飼育学年は「様子」について自分たちが飼育していく中で体験した事実や考えを多く記述している。

「様子」の記述は、

A小では、飼育学年(4年) 15.1 個
 と飼育前学年(3年) 5.1
 個、

「分類」の記述は、

A小では、飼育学年(4年) 15.1 個
 と飼育前学年(3年) 5.1
 個、

個、

B小では、飼育学年(3年)150個
と飼育前学年(4年)58
個、

C小では、飼育学年(4年)256個
と飼育前学年(4年)19個
であり、どの学校でも、「様子」の記述が
飼育学年の方が飼育前学年よりも多く記
述できていた。

③全体の個数を比較するために個数の多
い順に並べてみると、

C小飼育学年(4年)10.6個
→ B小飼育学年(3年)・・・8.8
個
→ B小飼育前学年(2年)・・・7.3
個
→ C小飼育前学年(3年)・・・6.3
個
→ A小飼育学年(4年)・・・5.6
個
→ A小飼育前学年(3年)・・・3.1
個

であった。

このことについて、次のように考察し
た。

・C小学校は、学校に入る校門のすぐ横
にウサギとニワトリ、アヒルの飼育小
屋があり、児童は毎日、そのそばを通
って登校する。また、4年生全体でウ
サギを飼育している学級とニワトリを
飼育している学級があり、お互いが高
め合うための飼育の交流も継続的行っ
ている。

・A小学校は、ウサギのみの飼育であり、
飼育担当以外の児童は飼育小屋に行く
ことは少ないし、飼育活動の交流も継
続的には行われていない。

以上により、4年生が飼育学年、3年
生が飼育前学年という同一条件であ
っても、C小学校とA小学校で記述す
る個数が大きく違う原因は、飼育環
境や飼育種類、飼育の交流回数の違
いが影響していると考えられる。

注目すべきは、B小学校である。

この学校は40年ほど前に県内に先駆
けて「動物ランド」をつくり、各学年
が分担していろいろな動物を飼育し
定期的な活動の交流を行っている。
この「動物ランド」は、保護者の協
力で建設されたもの

でもあり、地域ぐるみで、子ども
たちに動物を愛する心情をもてるよ
うにさせているし、維持や管理など
に関しても、餌の調達や施設の補修
など、継続的に協力してくれている。
また、ビッグイベントである「動物
ランド祭」も創設当時から今に至る
まで、実施されている。

飼育前学年の2年生も同じランド
内でモルモットを飼育しており、常
に自分たちが飼育している動物以
外の動物の観察も行える環境にあ
る。

この飼育環境や飼育種類、飼育体
験から、3年生であってもA小学校
の4年生よりも多く記述できている。
また、2年生であってもA小学校の
3・4年生、B小学校の3年生より
も多く記述できている。まさに、飼
育環境や飼育種類、飼育体験など、
学校での動物飼育が児童一人一人
の豊かな心情を育成しているのだ
である。

4. おわりに

以前、C小学校のある市の教育長
さんから、こんなお話を伺ったこと
がある。

「E中学校には、C小学校とD小
学校の子どもが来るが、C小学校の
子どもたちは挨拶もしつかりする
し、心優しい子どもが多いと先生
方が話されている。きっと、継続
して動物を飼育しているからでは
ないかと私は感じている。動物を
飼育することは大切なことですね。」

動物を飼育すれば子どもたちの心
豊かな人間性は必ず醸成されることが、
今回の研究からも少し、明確にな
ったと感じている。今後も、動物
飼育のが子どもの心情に与える調
査を行い、その結果を多くの場で
報告し、動物を飼育する学校が一
つでも多く増えていくことを願っ
ている。

【参考文献】

・文部科学省「小学校学習指導要
領解説生活編」日本文教出版、平
成20年8月

・小椋郁夫、堀部昇、白木和雄「学
校での動物飼育とその成果：平成
18年度岐阜県獣医師会シンポジ
ウム(小椋2007)」

- ・小椋郁夫、堀部昇、白木和雄「学校飼育動物の現状と課題：日本理科学会全国大会（2007）」
- ・小椋郁夫、堀部昇、白木和雄「動物を飼育した子どもや教員の感動の体験：第8回全国学校飼育動物研究会（2008）」

（名古屋女子大学）